

24

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
小林 邦久	男性	83歳	18歳	中宇利

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

台湾のキールンという港で、衛兵当番をしていた。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

キールンの小学校に集合して、隊長から聞いた。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

残念で、泣いている人もいた。私は、そんなバカなという信じられない気持ちだった。戦況が悪いという情報は、ほとんど入らなかったから意外だった。終戦の声を聞くと、すぐにニセの接収品屋*1が往来するようになった。ピストルとか日本刀とかの接収が始まった。憲兵が立ち会い、接収された。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

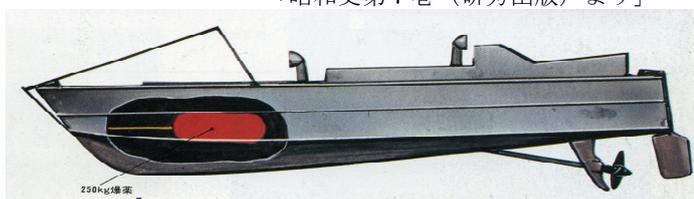
「特攻隊の船を運んだ」

私が広島県の宇品港から特攻隊の船を乗せ、沖繩に着いたのは、昭和19年1月3日のことだった。その前日、沖繩は米軍の空襲を受けたばかりで、市内のあちこちから煙が上がっていた。5日には台湾に向けて出港した。私は、陸軍船舶陸軍隊の船舶工兵で、船団を組み、台湾からフィリピンへ弾薬や特攻の船などを運搬するのが主な任務だった。

昭和20年になったある時、特攻隊の船(マルレ)を8艘積んだ。船の前方の左右には、爆弾を積んだ。すぐに体当たりできるようにするためだった。特攻用の船はベニアの板でできていて、自動車のエンジンで進むようになっていた。元戦車兵で、特攻隊に志願した8人を乗せ、フィリピンに向けて出港しようとした。自分より年上で、ある程度経験のある20代の若い兵士たちだった。

ところが予定が遅れてしまい、仕方なく台湾で特攻隊の小舟を下ろして上陸させてしまった。何とも申し訳ない気がした。しかし、航行中に積んでいた爆弾が破裂しなかったのは幸いだったし、若い兵士の命を散らさずに済んだのも幸いだった。

「昭和史第7巻(研秀出版)より」



▲マルレと同型の水上新特攻艇「震洋」6200隻制作された

陸軍水上特攻艇(通称マルレ)

小型のベニヤ板製モーターボートに爆弾(約250kg)を積み、兵士が操縦し、上陸しようとしている敵艦に体当たり攻撃することを目的とされた。

追い込まれた日本軍が、人命を無視した無謀な特攻で戦果をあげようとした。人間魚雷の回天や戦闘機による神風特攻隊が、よく知られている。

*1 接収とは、国家などの権力が個人の所有物を強制的にとりあげることという。

○ 機銃掃射

米軍機の機銃掃射で、若い人が銃弾を受けて右腕を貫通し、腕を切り落としたことがあった。機銃の弾の威力はすさまじく、船からの反撃は全くできなかった。船の機関銃はあってもないのと変わらなかった。飛行機からの攻撃には、全く無抵抗だった。



▲ 武器を持たずに復員する兵士

○ 復員のこと

自分が復員したのは、終戦から1年以上経ってからだだった。それまでは中国軍の指揮下であり、港まで荷物を大八車で運搬する仕事などをやらされた。日本の船で鹿児島島の桜島に到着したのは、昭和22年の正月ごろだった。港の土を踏んだ時、やっと日本に帰れたと実感した。

鹿児島からは、電車で豊橋まで来た。途中で見る景色は、出征する時とは様変わりしていた。福岡、広島、大阪、名古屋などの大都市は、空襲で市街が分からなくなるほどひどい状況だった。電車内は人がいっぱい、乗り降りもできないほどだった。

豊橋もひどかった。視界に入るのは焼け野原で、どこがどこか分からなかった。そんな中で、豊橋公会堂だけは焼け残っていた。掘って建て小屋のバラックに住む人たちが目に入った。見るからに腹を空かせた子どもに、持っていたカンパンをあげた。何度も何度も頭を下げられた。運送の牛の荷車が通り、「おーい、乗っていくか?」と言われた。玉川まで乗せてくれて助かったし、何よりも心があったまった。

中宇利まで来ると、公会堂で演芸会の練習をしていた。私を見つけた近藤重次さんが、「おーい、小林が帰ってきたぞ〜!」と大声でみんなに知らせてくれた。みんな「邦ちゃんが帰ったぞ!」と喜んでくれた。懐かしい顔に出会えて、やっと故郷に帰った気がした。家に行くと、親父や弟、妹がいた。きよとんとした目で私を見た。邦久だと分かるのに時間がかかったようだ。あまりにきたない格好をしていたからかもしれない。それと分かると、心の底から喜んでくれた。「よく生きて帰った。それが何よりの手柄だ。」と、親父が喜んでくれた。

驚いたのは、他に見知らぬ家族がいたことだった。遠い親せきとかで、浜松から疎開してきた家族が6人いた。浜松の家は空襲で灰になったという。こんなところにも、戦争の傷跡の深さを感じた。

○ 食生活

終戦後のわが家の食生活は悲惨だった。米はほんのわずかしがなく、二等の小麦とイモが主だった。塩もなく、味もないようなものばかりだった。イモのつるも汁に入れて食べた。戦争なんて、バカなことをするもんじゃないと心から思う。